
人違い勇者の冒険記

日野五十鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人違い勇者の冒険記

【Nコード】

N9574K

【作者名】

日野五十鈴

【あらすじ】

ごく普通のサラリーマンだった生田浩之が、人違いで『勇者』にされてしまった！！ しかもお姫様を助けて魔王を倒すまで帰れない。故郷に妻子を残したままの浩之は無事帰還できるのか！？ 王道（？）冒険ファンタジー、ここに参上！

【12話完結シリーズ第4段！！】

人違い勇者の冒険記（1）

しんしんと、音もなく名残雪は降る。

雪は街を白一色に染めていく。

町にある小さな教会で、マクミラン牧師はただ一心に祈っていた。

祭壇はステンドグラス越しに入ってくる光で彩付き、そこにはあららと降る雪が影を作る。

と、静寂の中にやはり音もなく、床から半透明の腕が現れた。

1本だけではない。2本、5本、10本…床下に誰か潜んでいるとしたら、最低5人はいることになるだろうか。

「…見つけたのですか」

腕は肯定の動きを見せる。

「その方はどこに」

腕は、指先で地図の一ヶ所をトントンと叩いた。

「…分かりました。ではその方をお迎えに行ってください」

腕はしばらく海藻盆踊りをしてから、音もなく床下に引っ込んだ。

そして牧師は、教会の中にまたひとり取り残された。

「…どうか、気をつけて…」

そして折り畳んだ地図に手を伸ばす。

と。

「ああああああッ!!」

先ほどは違う、地獄を見たような絶叫に教会の荘厳な雰囲気が一掃された。

「しまったああああ間違えてしもうたああああ!」

国王から直々に賜った、勇者がいると云われる異世界の地図である。しかしあまりに巨大なため、牧師は折って使っていた。つまり、…勇者がいると絞りこんだ区域とは裏表逆に使用していたのだ。

「げふんげふん。ま、まあ腕が“いる”というのだから、そのお方でも間違いないということだろう。うん、そうに違いない」

勝手に自分の失敗を正当化してから、牧師は首を傾けた。

「…しかし“彼”ではないとすると、いったい誰が…?」

雪は街を白一色に染めていく。



季節はすっかり春になった。

生田浩之^{いくた・ひろゆき}の妻・江梨子^{えりこ}が朝食の準備をしていると、急いで階段を駆け降りる音がした。

今年高校に進学したばかりの娘の恵^{めぐみ}だ。

「めぐー、ご飯は？」

「いない」

本人曰く『朝食なんか食べてる時間はない』ということだが、ボリウムたっぷりのマスカラが、単に睡眠時間の確保のためだけでないことを物語っている。

恵は行ってきますも言わずに外へ飛び出した。中2になる息子の賢^{けん}人は、部活の朝練とかで朝早く学校に出掛けていった。

浩之は朝食を食べ終わると、椅子に引っ掻けていたスーツに手を伸ばした。

「さあゝて、んっじゃあ俺も行くかな」

江梨子が曲がったネクタイを直してくれる。浩之はふと思い出して妻に言った。

「そうだ。今日お得意様と飲み会だから、晩飯いいや」

「あらそう？ あんまり飲みすぎないようにね」

そう言って江梨子はたしなめる。

浩之は商社の営業部長だった。ゆえに接待も頻繁にある。営業は人付き合いが肝心だ。

玄関先で、江梨子はカバンを手渡した。絵に描いたような良妻賢母ぶりだ。

「じゃ、行ってくる」

「言ってらっしゃい」

そうして浩之も出社した。

浩之には、知る由もなかった。

運命の歯車が、間違った形で廻り始めていることに。

通行人はおろか本人さえ気づかなかったが、浩之の歩いた後に半透明の腕がによきつ、によきつとアスファルトを貫いて現れた。

しかし半透明の腕は何事もなかったかのようにまた地面の中へナリを潜めたのだった。

人違い勇者の冒険記(2)

王城、謁見の間。

「…そう。隣国の姫は監禁したんだ」

満足そうに微笑むのは、この国の王。

国王としては若い。まだ14歳かそこらに見える。ベリーショート
の髪は黒く、面白そうに笑う両の目も黒い。斬新なデザインの黒衣
を身に纏い、その右手には聖杖を持っていた。

「でも、見張りも何もつけないで大丈夫なの？」

「は、心配には及びません。あの鎖は、聖剣を持つ者にしか断ち切
れぬようになっています。陛下以外にあれに触れる者はおしま
せんゆえ」

「ふーん…」

「それとこれは急報ですが」

黒衣の部下たちは揃って頭を下げた。

「陛下のお探しの封印石の所在が、分かりました」

「本当!?!」

「は。3つとも、確かに」

「…分かった」

少年王は杖を鳴らした。

「ご苦労だった。あとは僕が行くことにする」

「ええっ!?!」

黒衣の部下たちは揃ってブツ飛んだ。

「お、お考え直してください陛下っ。へ、陛下が御自ら行かれるなど、ききき危険すぎます!」

少年王は立ち止まると、ゆっくりと振り返った。

「あれは僕之物だ。僕が取りに行く。それとも、僕の魔法の腕を信用してないの?」

「めっ、滅相もございません。ですが…」

「第一、封印石に触れる人、僕の他にいる?」

「う…」

晴れやかな笑顔で言われて、黒衣の部下たちは揃って言葉に詰まった。

「…というわけだ。留守の間、城を頼む」

そう言って少年王は立ち去った。

△▽△▽△▽△

「では、今後ともよろしくお願いします」

「うむ」

取引先の相手は満足げに帰っていった。浩之は営業用スマイルを解き、ほうっとため息をつく。

（…ちよつと飲みすぎたかな…）

ケータイの時計に目をやると、もう終電の時間は過ぎていた。仕方ない。タクシーで帰るか。

駅前のタクシー乗り場に向かおうと、繁華街を歩いていたときだった。

「おい、おっちゃん」

気安く肩を叩く手に浩之は振り返る。

気がつくのと、ガラの悪い危ない感じのお兄ちゃんたちにぐると囲まれていた。

「ゲフツ」

「おら、カネ出せや金え」

そのまま路地裏に引き込まれ、財布を出せとボコボコにされる。殴られたときに足がふらついて倒れたが、積み上げてあった段ボール箱に背中と臀部を打ち付けただけで幸い大きな怪我はなかった。

綺麗に整頓されていた段ボール箱がバラバラと崩れる。

「さっさと出すもん出して、スッキリしろってんだよォ！」

便秘じゃないんだから。

危ないお兄ちゃんの足が目の前に迫る。瞬きをする余裕もない。

だが足は一瞬にして目の前から消失した。

「？」

霞む目を凝らして観察すると、そのお兄ちゃんは遙か先…向こうから見て後方の壁に吹っ飛ばされていた。

「…テメエ…なにしゃがる!!」

「いや…俺は…何も…」

ひとこと弁解しようと言葉を探していると、視界の端に奇妙なものが過った。

うようよと動く。

半透明の。

「…う、で…?」

「ひひひひひっ!?!」

「お、おい逃げるぞっ」

危ないお兄ちゃんたちは我先にと逃げ出した。あっちにも見えるということとは、酩酊状態で見える幻覚じゃないらしい。

「……。…あのー」

と、半透明の腕が浩之の腕をガシッと掴んだ。

「うえ?」

腕だけではない。足も、肩も、頭も、…身体中いたるところを。

「う、あ、やめ…」

掴まれた先から、浩之の身体は徐々に透明になってゆく。身体だけではない。スーツも、ネクタイも、ガラス細工のようにあちらを映すだけとなっていく。

「やめろ…やめろ…」

腕は自分と同じ体温のまま、浩之を離す気配はない。というか、もはや掴んでいるのか離されているのか分からない状態だった。自分と腕の境目が分からなくなる。自分が自分じゃなくなる気分に襲われる。

「やめろおおーっ!」

特に特徴もない、普通の路地裏。

人通りは全くと言っていいほどなく、猫一匹通らない空間。段ボールはバラバラに崩されている。

ただひとつおかしなところを挙げるとすれば。

そこでひとりのサラリーマンが一瞬にして姿を消した。

人違い勇者の冒険記(3)

「ああー…うああー…」

透明の次は極彩色。

極彩色：極彩色：目がチカチカするような極彩色…。

「やめろお…うあ…止まれえ…」

極彩色はどんどん色を変えていく。色の数は徐々に少なくなり、大きく分けると青と白、この2色のみになった。そして青は上に、白は下に固まった。

「な…んだこれ…雪？」

目の前に見えたのは雪景色だった。街一面を白に染めた雪景色。でも。

(いま5月だぞ!?)

そう、5月なのだ。青葉は繁っているが冠雪しているのは富士山くらいなもので、北海道でも新潟でも雪は溶けているだろう。

そこまで思って考えを改めた。グローバルに地球規模に見て、永久凍土の場所も考えられるからだ。

「な、なんで目の前に雪景色が…？」

よくよく状況を把握しようと、足を動かした。

そのときだった。

ベキッ。

何か、木の枝が折れるような音が耳に響いた。

「ん？」

浩之が足元を見ると、身体が謎の浮遊感に襲われたのは同時だった。

「あいったあゝ！」

浩之は臀部に猛烈な痛みを感じて、思わず飛び上がった。飛び上がると今度は後頭部に痛みを感じた。

「またいったあゝ！」

「あいつ！…てえ…」

浩之の『痛い』と誰かの『痛い』が重なった。誰か背後にいたのかと、咄嗟に後ろを振り返る。

「誰ですか…」

「おいコラてめえ、作業中にボサつと座ってんじゃねえ！　しかもいきなり立ち上がるな！！」

浩之はくると方向転換して座ったまま後ずさった。そしてビシツと一喝してきた人間の姿が分かる。

「…な…！？」

ムキムキマツチョ、あんど、髭面。くすんだ金髪と目の青い、たぶん自分と同じくらいの歳で、肩には大きな荷袋を担いでいる。

相手の方も自分を観察していたらしい。爪先から頭のとっぺんまでじろじろ見つめられ、そして鼻で笑われた。

「見慣れない格好だな。流れ者か？」

「流れ者…え？」

「貧相な身体してるが、大の男は荷運びが仕事なんでな。ほらよ」

「うわっ」

担いでいた荷物を受け取った浩之は、その重さに腕が抜けそうになった。

（なっ、なんだこの重さは…！）

「お前、名前は」

まず自分からだろう、と言える雰囲気ではなかったので、そのまま名乗ることにした。

「浩之…生田浩之」

「イクタヒロユキ、か。長ったらしい名前だな。ヒロでいいだろう。よし、今日からヒロだ」

生田浩之、改めヒロの、これが地獄の始まりだった。

極彩色に染まっていたので分からなかったが、着いた先は炭坑で、今まさに労働の真っ最中だった。

労働の真っ最中？

空を見上げればどこまでも青い空。危ないお兄ちゃんたちに襲われたときには、すでに深夜だったというのに？

その思考は誰かが打ち据えてきたシャベルかツルハシで遮断された。

仕方なく荷袋を担ぎ直す。

(あくでもこんな仕打ちって…)

スーツとネクタイはすでに取ってしまった。着てないと寒いくらいだが、この労働スタイルでは邪魔でしかないのだ。5月の日本にいたはずなのに、ここはどこだ!? どの何月だ!?

心の片隅の卑怯な部分では、この1往復だけ頑張れば、夢から覚めるのではないかと信じていた。だが。

ぶっても蹴ってもつねっても、夢は一向に終わらなかった。

しかしまだ1週間は粘れそうだ。これでデブった下っ腹を引き締める効果があるなら安いもの、ひよっとしたら胸板も厚いプチマツチヨになるかもしれない。そう自分に言い聞かせながら。

「くそっ。でも、いらない、筋肉も、ついちゃいそう、だなっ」

何十往復カ目で鐘が鳴り響き、列はネジでも切れたみたいに止まった。炭坑に入っていた少年たちも穴から出てきて、なにやら追悼のポーズめいたことをしている。

「ほら、ヒロも神に祈れ」

追悼どころかお祈りだった。郷に入れば郷に従え、ヒロも見よう見まねでポーズをとる。

すると、入り口らしきゲートから、その場に似合わない人物が入ってきた。

(ザビエル！)

髪をかの有名なザビエルカットにした、聖職者らしき人だった。プロテスタントなら牧師でカトリックだったら神父だろう。しかし彼はザビエルとは違って、髪も髭も着ているものも白だった。

「失礼します。毛色の違う新参者がこちらにいますと聞きましたが」

「はいマクミラン牧師。あちらにいますが」

そう言われてマクミランと呼ばれた牧師はヒロを見た。牧師ということはプロテスタントで、あのザビエルカットも天然物か。

と、マクミラン牧師が足早にヒロに詰め寄ってきた。

「あ、あなた様は…！」

そう言ってヒロの手を握り、ズルズルとその場に跪く。

「え、と。あの…？」

「異界からの勇者様、お探し申し上げました…！」

ヒロは意味が分からなかった。

人違い勇者の冒険記(4)

部屋は暖かく、薪ストーブに火が入っていて、汗で冷えたヒロの身体にはありがたい環境だった。渡された、やけに装飾のある剣を腕に抱いて、ヒロは椅子を動かした。

「勇者様、寒いとお思いかもしれませんが、この国ではこれでも春なのです」

ヒロは火の近くに椅子をずらし、背凭れに寄りかかって暖炉にあたっていた。一般的には電灯がぶら下がっているはずの天井には、山小屋にありそうな心許ないランプ。

「…季節まで細かく設定してるなんて…どこまで凝ったアトラクション…」

「あとら…？ げふん、そのようなものではございません」

「だってそんなこと急に言われて、信じられるわけないだろ！？？」

勇者勇者ってさあ、俺は生田浩之45歳、神海産業こうみの営業部長なの！
なのになんで俺が勇者になるわけえ？ そこんとこちゃんと説明してくれないと分からねーよっ」

ヒロがくわっと叫ぶと、横に立っていたマクミラン牧師は跪いて話し出す。

「では申し上げます、勇者様。今から1年ほど前、隣国に年若い王が即位しまして、それが魔術の達人であらせられました。その国は王の力を使って、次々と国を征服しているのでございます。しかし小国には隣国の王とも勝るとも劣らない魔術師がおりましたが、その方が隣国の者の手により塔に監禁され…」

「ちょっと待って。あまりにも畏まりすぎてよく分からない。できればもっとくだけた言葉で」

「そんなご無理を仰らないください。勇者様は勇者様であらせられるのですから」

「だから勇者勇者ってさ、俺の名前は生田浩之なの。つまりこういうことだよな？ 1年前に魔術師の王が隣国で即位して、次々と国を征服していつてる。本来ならこっちにも強い魔術師がいるから大丈夫のはずだったけど、その魔術師が閉じ込められた。それを俺に救ってほしい、と。何か違う？」

「その通りです」

「あっそ…って何この設定！？ ゲームか！？ ゲームにしたって変でしょ！！ なんて呼ばれた勇者が45歳のオッサンなの！？ フツーもっと体力も知力もある年齢が行くべきでしょ！？ 」

「あーうー…それが…その…あーうー」

「何ですかその歯切れの悪さは」

「ですから、そのお…あーうー」

「ハッキリ言ってください!!」

ヒロの一喝にマクミラン牧師は汗をふきふき言った。冬なのに。

「では申し上げます!」

光る汗、太陽に輝くザビエルカット。

「…人違いだったのです」

「人違い?」

「はい…本来なら10代の、それも知力の高いお方を呼ぶ手はずでした。ですが“腕”があなた様をお選びになり…」

「腕って、俺を迎えに来たあの半透明のやつか?」

「はい…“腕”は我々牧師にも使える魔術、それでいて絶対に失敗はございません。“腕”があなた様をお選びになったのは、当初お探し申し上げた勇者様に、何らかの事情があったからなのか、それともあなた様がその方の血縁者だからなのか…」

そこまで聞いて、ヒロの脳裏にある人物が閃いた。

(賢人…!)

いやまさか、とヒロは首を振った。

息子の賢人はまだ14歳だ。魔術師としては手頃だが、勇者にしては少々頼りないだろう。それに賢人は思慮深くて大人しい、悪く言

えば覇氣のない少年だ。親としての鼻屑目で見ても、とても勇者が務まるとは思えない。

マクミラン牧師は『とにかく』と目（と、頭）を輝かせた。

「腕”が選んだからには、あなた様にも充分に勇者の資格があるという証拠です。それにこの聖剣、これに触れる者は勇者様か我々聖職者だけです。今では自信が確信に変わりました」

「マクミランさんたら：どこかで聞いたこと言っちゃってさ：」

だが、とヒロは頭の隅で思っていた。こういうシナリオは大抵の場合、勇者として喚ばれた主人公は問題を無事に解決し、めでたしめでたし一件落着となって終わる。とにかくこれを終わらせるには、向こうの話に乗るしかないわけだ。

「分かりました。信じろったって俺には無理ですけど、やるからにはちゃんとやりますよ。どこに行って誰を助けてくれれば、家族のもとに帰してくれるんですか」

マクミラン牧師は窓越しに高い塔を指差した。結露に歪んで形は分からないが、遠目でも相当な高さがあると分かる白い巨塔だ。

「あの白い巨塔のてっぺんに、小国でも有数の術者であらせられます、陛下の姫君が捕らえられております。その方をどうかお助けになって、3女神の封印石をお集めになり、そして隣国の蛮王を倒してください」

「……………は？」

ヒロは耳を疑った。

「お姫様をお助けして…なんだって？」

「ですから、聖剣を凡剣から成り上がらせる秘密の石、3女神の封印石を集めて、隣国へと渡りかの王を倒すのです！」

ああーやっぱり宝を集めて敵を倒せとか言ってるよおー。ヒロは全身の力が抜けた。お姫様助けるだけでもどれだけかかるか分からないのに、宝を集めて敵を倒せ！？ そんな馬鹿な。会社だって無断欠勤なんだ。そんなに長い間異世界にいたら確実にクビになる。それどころか行方不明者としてビラとか貼られるのかもしれない。ていうかFFもドラクエもろくにプレイしてないんだ。ラスボスに倒されでもしたら、行方不明どころじゃ済まないじゃん。

しかも、単なる人違いで。

（ああーうそおー誰か嘘だと言ってくれえー）

「勇者様しっかり、嘘ではございません。おめでとうございます、今日から貴方は勇者です！」

何がおめでたいものか！ とヒロは心の中で叫んだ。

人違い勇者の冒険記(5)

そこには、白々とした大きな塔が影のようにそびえ立っていた。まるで三日月にまで届くかのような高い塔だった。

ヒロは深く考えもせず、ボソツと感想を口にした。

「塔の中のお姫様か」

だが大抵の場合、助けに行くのは強く勇敢な若い勇者だ。そして綺麗なお姫様と結ばれる。だったらなぜに、助けに行くのが四十路のおっさん？

冗談じゃない。故郷には愛する妻も子もいるんだ。まかり間違ってもお姫様と結ばれたりなんかするもんか。

「…ただ人違いってだけなのにな…」

塔の扉をそろそろと押すと、難なく開いた。

「…青くてちっこくてタマネギ型のモンスターとかいないだろうか…」

いや、それ以上のレベルを持ったモンスターがいてもまた困るのだから。黄色いネズミ程度なら、無問題。

ヒロは螺旋階段を駆け上がった。ちなみに、まだモンスターとは遭遇していない。まるで永遠に続くように思えた階段は、唐突にぽかりと終わった。

屋上はしんと静まり返っていて、モンスターどころか、何の気配もなかった。他の生き物の気配が一切ないのだ。獣や鳥や、虫の鳴き声さえ聞こえない。不気味なほどの静けさだった。…いや。

（…赤ん坊の泣き声？）

不意に、どこからか赤子の泣き声のようなものが聞こえてきた。なぜこんなところに赤ん坊が？

ヒロは剣をぎゅっと握りしめ、声のする方へと足を進めた。

そして間もなくたどり着き、…ヒロはあんぐりと口を開けた。

「…た、確かに青くてちっこくはあるけど…」

タマネギ型じゃない。呪文を唱えるくらいでは退治できなそうな生き物が鎖に繋がれていた。

竜だった。まだ角も翼も小さな子供の竜。さっきの泣き声はこいつのせいだったのだ。

子竜は足を鎖に繋がれており、時折パタパタと小さな翼を羽ばたかせて宙に浮いた。しかし鎖に飛行を邪魔されて地面に激突し、わあわあと人間の赤子のような声で泣く。

「…自由に…して、ほしいの、か？」

子竜はうるきゅーとした眼差しでヒロを見る。

「…鎖解いても襲ったりしないって、約束してくれるかなあ？」

うるきゅー。

「…ハイハイ…いま自由にしてあげますからねー」

ガシャツ！

ヒロは鎖に剣を突き刺して、子竜の戒めを解いてやった。

すると子竜はヒロの頭上を旋回するように飛び回り、それから名残惜しそうに後ろを振り返ってから飛び立っていった。

「達者で暮らせよーお！」

「…誰？」

不意に人の声が聞こえて、ヒロは文字通り飛び上がった。

背後にいたのは。

「……………」

「……………」

「…めぐ…じゃない、…姫？」

「…その剣は…聖剣？…まさか…！」

姫は『えーっ』と失望混じりの驚愕の声でヒロを指差した。その手にも鎖が巻かれている。

「なんつで迎えに来た勇者がこんなオヤヂなのよー！ あーもう信じられない信じらんない。3女神の奴一生恨んでやるうゝ」

信じられないのはヒロの方だった。なにせ“姫”は娘の恵にそっくりだったのだ。

いや、細かいところに相違はある。髪は娘のような茶髪ではなく濃い紫色だったし、瞳の色も日本人種には珍しいハニーブラウンだ。だがその点を除いては、顔も体格も声も口調もまるで恵を生き写したようだった。

姫は鎖に繋がれたまま更に続ける。まだ勇者Ⅱ冴えないおっさんシヨックが抜けきれないらしい。

「しかもなんでミニドラ逃がしちゃうのよー！」

ミニドラ！？ ヒロの頭には一瞬、ド〇えもんの小さいやつがポンツと浮かんだ。

「ミニドラって、あの竜の子供か？」

「そうよ！　だから…ほらっ！」

背後を指差され、ヒロは振り返った。

振り返った瞬間、凍りついた。

（で、で、でけー！）

そこには、子竜の親とおぼしきドラゴンがこっちに向かってきていた。

でかい。角も翼も爪も口も尋常じゃないくらいでかい。今にもあの鋭い爪で八つ裂きにされて喰われそうだ。

「おいそのオヤヂ勇者！　とっとこの忌々しい拘束具を解きやがれ！！」

「お、おう…」

姫、ピンチとはいえその口調はお品が悪いぞ。とは言えず、ヒロは聖剣で姫の鎖を断ち切った。

すると姫はドラゴンを前に手を翳し、目を閉じて何事か唱え始めた。

「気高き炎の霊よ、汝と共鳴せし我が手中に集え！」

すると、どこからか火の欠片が手中に集まりだし、大きな炎の玉へと変じた。

（なっ…！？）

非現実的なものを見ても、ヒロは現状を素早く理解した。姫は魔法でドラゴンを退治する気だ。

「我に敵対する者を闇に葬…」

「わー待て待て！ まさかあんた、あのドラゴンを焼き殺そうってんじゃないだろうな！？」

「他になにがあるってのよ！」

「やめろそんな惨いこと！ 俺はあいつの子供を助けたんだ。恩を仇で返すとは限らないじゃないか！」

「はあ？ あんたバカあ？ ミニドラは私の見張りで、それがあのドラゴンに密告したに決まってるじゃない」

「だとしても殺すわけにいくかよ！ まだ小さな子供がいるんだぞ！？」

「ちっ、煩いオヤヂだね」

「なんだとお！？」

「なによ！！」

と、あたりがなんだか静かになった。

「…っれ…？」

見るとドラゴンは翼を羽ばたかせながら、目に涙をためていた。

「……………」

「……………」

そしてドラゴンは何事もなかったかのように、空中でUターンしたのであった。

「…助かつ、た…？」

「…みたい、だね…」

姫は無事救出し、モンスターは…退治したわけじゃないが…なんとか追い払った。

ミッション、クリア。

「…助けてくれて、ありがとう。…ええと…」

「ああ、そっか。…ヒロ。生田浩之」

「…私はマーガレット・コンラッド…この国の王が一女だ」

ヒロはにっこりと笑った。

「そう…よろしく、マーガレット姫」

姫はヒロをためつつがめつすると、そっぽを向いて『メグでいいよ』と言った。

人違い勇者の冒険記(6)

太古の昔、まだ世界が混沌としていた頃。世界に主神の子、3姉妹の女神が降り立った。

知恵と勇気の神・三女ソフィア。

彼女は混沌の中から上下、左右、明暗などの“境”を作った。

節制と徳の神・次女アレティ。

彼女は境を中心に天と地、海と陸、昼と夜などの秩序を整えた。

愛と正義の神・長女エル。

彼女は秩序に則り、水や炎、大地や風、金属や木々など世界に様々な物を生んだ。

3女神は使命を終えると地上に封印石と聖剣、聖杖を遺し、天上に帰っていった。

しかし封印石が聖剣、聖杖に戻りし時、3女神は再び降臨するだろう。

大いなる決意を抱きし者、聖剣、聖杖を持ち、封印石を集めよ。さすれば。

「大願叶うであろう…これが代々王家に伝わっている伝説だ」

塔から無事お姫様を救出したヒロは、封印石探しの旅に出ていた。
今の伝説からすれば、隣国の王様退治が“大いなる決意”にあたるのだろう。

「そんな大事な話を俺にしちゃって大丈夫なのか？　メグ」

お姫様…メグはチラとヒロを見ると、フツとシニカルに溜め息をついた。

「あんたは仮にも勇者でしょ？　聖剣を持つ勇者に女神の伝説を伝えるのがあたしの務め」

「…仮の勇者で悪かったね…」

人違いだけに否定できない。

それに…とメグはいきなり真剣な面差しを向けた。

「隣国の王は聖杖を持ってる」

「聖杖？」

「あんたのその聖剣と似たような代物よ。魔術発動装置とでも思えば間違いないわね。それを発動させるには封印石が必要なの。だから隣国の王もせっせと集めてると思うわ。しかも封印石は、この国であたししか触れないんだもん」

「ええええええ！？」

まさか。

「てことは、俺はハイティーンたる君と衣食住を共にして、この世界のどこかにある封印石とやらを集めろというわけデスカ！？」

「あら、察しがいいのね。ただの馬鹿オヤヂじゃなかったんだ」

「オヤヂは甘んじて受け入れるが、馬鹿は年上に使うなーっ！！」

そうでなくても君の2倍以上の年月を生きてるんだぜコンチクショ
ー。

ヒロは心の中だけで叫んだ。

△▽△▽△▽△

「…ついにみつけた…！」

一方、件の少年王は体よく“愛の封印石”を手に入れた。魔術師たる彼は封印石をその手に触れられる。しかし“愛の封印石”。なん

だかちよつとこつ恥ずかしい。

「あとは1つ」

聖杖にはすでに“知恵の封印石”が埋め込まれている。残るは“節制の封印石”だけとなった。

と、一筋の風が少年王の耳を掠め、その情報を囁いた。

「…そうか…聖剣を持つ者が現れたのか…」

少年王は真摯な眼差しで聖杖を見つめる。

「いま助けにいくよ、囚われの女神様」

そう言って少年王はマントを翻した。

△▽△▽△▽△

「で…これからどうするの？」

ヒロは馬車に揺られながらメグに訊いた。ヒッチハイクの要領でうまく旅の馬車を捕まえ、隣の街までつれてってくれることになって

いる。

「そうねえ…まずはアンコール・ナット遺跡にでも行ってみる？」

その、アンコールワットみたいな名前の遺跡はなんだ。ヒロが一言
ごねようとする、メグはしれっとした顔で説明してくれる。

「最近発見された古代遺跡だよ。3女神を奉つてある。正確には三
女ソフィアが奉られてるんだけど…もしかしたらそこに“勇気の封
印石”があるかもしれない」

「勇気の封印石？」

まるで仕組みを分かっていないヒロにメグは呆れ、はああと深い息
をついた。

「いい？ 封印石は6つあるの。“知恵の封印石”“勇気の封印石”
“節制の封印石”“徳の封印石”“愛の封印石”“正義の封印石”
”この6つ。そのうちその聖剣に嵌め込むのは“勇気”“徳”“正
義”の3つ。聖杖を持ってる隣国の王は残りの3つを集めてること
になるわね」

「ちょっと待って。てことは、2つとも回収しないと封印は解けな
いってこと？」

「あんたバカあ？ 誰も封印を解けなんて言ってないでしょうが。
…まあどのみち、向こうに先越されてたら、封印は解けちゃうでし
ょうけど」

このお姫様、出会った当初から思ったが口が悪い。もっとこう、ス

○夫のママをリスペクトしたような口調にならないものか。いや、だからといって『ザマス』とか使われても問題なのだが。

「とにかく、行ってみるわよ。いいわね」

「……………。…はい…」

馬車がギシッと軋んだ。

人違い勇者の冒険記（7）

ヒロたちは、野生の王国っぽいジャングルを切り開いていた。

ツルや木の枝が邪魔なら斬り飛ばし（封印石がなくても普通の剣としては使えるのだ）、獰猛な獣はメグの魔法で威嚇して追い払った。

共にボロボロになりながらたどり着いた遺跡は。

「…カンボジア？」

「いや、アンコール・ナット。ソフィアを奉った神殿よ」

「だってどっからどう見たって、カンボジアの国旗に書いてある遺跡じゃん！ 色もカタチも雰囲気も場所も！」

テレビや写真でしか見たことはないとはいえ、かの神殿はカンボジアにある世界遺産・アンコールワットに激似だった。名前が近いのも頷ける。

「…ええと…入る？」

「しかないでしょう」

そしてヒロはメグの手を引き、そろそろと移籍内へ入っていったのだった。



王の謁見の間。

自らの失態を『申し訳ございませんっ!!』と頭を床に打ち付ける部下に、少年王は額を覆った。

「…そう…姫は解き放たれたんだ…」

「はっ。まさか“聖剣”を手にすることが出来る者が現れるとは…ましてやドラゴンが攻撃せずに解き放たれるとは思わず…」

申し訳ありません!! と部下は額をしきりに打ち付けまくった。

「…まあいいよ。どのみち封印石のある場所には、刺客を差し向けてあるから。滅多なことじゃないと封印石は手に入らないと思うし。ほらほら、怪我しちゃうからもうやめて」

「なっ、なんと慈悲深きお言葉…!」

余計恐縮させてしまったようだ。

(…しかし、僕他に聖剣を手に行うことができる者って…)

少年王は小首を傾げた。



ヒロはアンコールワットに行ったことがないので何とも言えないが、封印石は地下にあるようだった。その証拠に、一枚岩で隠された下へと続く階段がある。

トンネル内に風はないが、炎が揺れる。空気が通っている証拠だった。枝道と呼べるほどの枝道もない。

「…長いな」

ヒロの声はこだまする。そして足を止めた。

「行き止まりだ…」

示した先は小さな広場になっている。メグは颯爽と、ヒロはややボテッと段差を飛び下り、ピラミッドの内部にありそうな広場を見回

した。

「…変だな、なにもない」

「ないはずがないよ。微かに何かの気配がする」

「わかるのか？」

「…何かの臭気がある…なにか、胸騒ぎを誘うような」

「?…ああ、更に下る穴がある」

「それか」

メグも覗き込む。その、…暗い穴。

「なにか…いる」

メグは呟いた。

「え?」

「剣を構えて。何か来る」

ヒロが剣を構えた刹那、その腕に突然何かが巻き付いた。

ヒロは声をあげなかった。悲鳴をあげたのはお姫様の方だった。

「ヒロ!」

驚いた表情のまま、ヒロの身体は頭から穴の中に引きずり込まれた。足掻く足が一瞬目の中に焼き付いて、我に返ったときにはすでにヒロの姿はない。

「ヒローっ!!」

悲鳴は、聞こえてこなかった。

人違い勇者の冒険記(8)

その暗い穴は下へ下っている。かなりの段差がありそうだった。

メグは穴の底へ飛び下りた。そこはまるで鍾乳洞のような広い空洞になっていた。

すぐ前に抜刀したヒロの背中が見えた。そしてその奥…未だヒロの腕に絡み付いた、巨大な影。

それは影の塊のように見えた。ヒロに絡み付いた腕の反対側、鎌首のような形の影が、真っ直ぐにヒロを狙っている。

「…幻術」

メグはチッと舌打ちした。この影から発する力…これを仕掛けた術者は、相当の力の持ち主と見える。

「ヒロ！ 大丈夫!？」

「だっ、大丈夫に見えるのかこれがっ！」

大鎌がヒロへと降り下ろされる。

しかしヒロはなんとかそれを剣で凌いだ。

「め、メグッ！ 黙って、見てないで、助け…っ」

女に守ってもらおうなんて情けない奴だ。メグは眉間に指を当てた。

「…しょーがないわね…」

そして腰から剣を抜くような動作をして指が空を斬った。

「臨兵闘者皆陳烈在前！」

「えええええっ！？ なにその忍者が唱えるみたいな呪文はー！」

なんだか去年あたりにやってた心靈番組をヒロは思い出していた。確か出演していたお坊さんが、似たような呪文を唱えてた気がする。

と、ヒロを戒めていた影がほどけた。

「なっ…」

「時間稼ぎのはずだったけど好機だね」

そして今度こそ忍術でも操るかのように指を組む。

「気高き風と地の精霊よ、汝と共鳴せし我が手中に集え！」

するとそのとき。

影が風を受けて身じろぎした。その下には巨大な穴が空いており、今まさにそこに吸い込まれようとしているのだ。

「我に敵対する者を闇へと葬らん！」

影は姿を変え始めた。

それは震え、萎縮し、凝縮するようにして、あまりに大きな獅子の姿へ。

さらに、虎へ。

さらに、鷲へ。

さらに、龍へ。

千変万化、その尋常でない力の証。というより。

「きゅ、球団のマスコットキャラクターばかり…」

ヒロにも戯れ言が言える余裕が生まれた。

メグがカツと唱える。

「参ります。…送冥府ッ！！」

「えええええっ！？ だからその漢字圏な呪文は何っ！？」

それとも昨今のRPGではフツーなのだろうか。

なんて思っていると、影は穴の中に吸い込まれていった。

影は痛々しい悲鳴だけを残して、その地面の中へと消えていった。

「…終わった…の？」

「…終わった、よ…」

メグの息が弾んでいた。

どこかの亀裂から光が漏れているらしく、穴の中は暗いものの、真の暗闇というほどでもない。

するとそこに、薄ぼんやりと明かりが灯った。

ヒロもメグもそちらを見る。モンスターの背後にあって気付かなかったが、そこには小さな女神の彫像があった。

その台座に埋め込まれている小さな石が、この狭い空間を照らしているのだ。

「これが、封印石か？」

「…どうもそのようね」

ヒロとメグは歩み寄る。石の隣には同じサイズの穴があって、すでに相方の封印石は誰かが手に入れた痕跡があった。

「どうやら“知恵の封印石”は先に取られたみたいだね」

紅く光る“力の封印石”にヒロは手を伸ばしたが、静電気でも喰らったかのようにバチツとなって触れることはできなかった。

「いつ、つてええーッ！…やっぱり、これってメグじゃないと取れないんじゃないの？」

「む、ムチャ言わないでよ！　なんで私がそんな危ないこと…」

「…メグッ！」

ヒロの射るような視線に気圧されて、メグは一瞬たじろいだ。

「わ、分かったわよ。取りますよ…」

メグの白魚のような指が封印石に伸びる。石は難なく台座から離れた。

「…ビビビってなったり、しない？」

「大丈夫。ほら聖剣に嵌めてあげるから、貸して」

「お、おう…」

“力の封印石”が聖剣に嵌め込まれる。

すると石はより一層輝きだし、まばゆいほどの光を放った。

「うおっ！！」

「きゃっ！？」

2人同時に目を塞ぐ。

次に目を開けたとき、そこには見知らぬ少女が宙に浮かんでいた。

「…誰…？」

「…ソフィア様…！」

「えっ!？」

あの3女神の末っ子だという神様だろうか。ヒロは仰天してホケーと少女を見上げていた。

「…封印を解いてくれてありがとう」

「へ？ あ、ど、どういたしまして」

「なんであんたがそれ言うのよ」

「お願い」

今にも泣き出しそうな少女の顔に、ヒロもメグも揃って首をかしげた。

「お願い。お姉様を止めて」

「へ？」

「お姉様は…を…しに…て…」

少女は壊れかけのテレビみたいに姿と声を歪めると、封印石へと吸い込まれていった。

「…なんだったのかしら？ 一体…」

「…さあ…」

ヒロは石を嵌め込んだ聖剣に目を落とした。

とにかくこれで、封印石の1つは手に入れたのだ。

人違い勇者の冒険記(9)

ふとした手中の喪失感に、少年王はクッと顔を上げた。

「陛下？」

「…力の封印石”が、取られた…」

「なんですと…!？」

信じられない、と少年王は首を振った。あの“影の魔獣”を易々と倒して、“力の封印石”を手に入れるなんて…。

しかしまだ残りの2つは取られていない。

少年王の聖杖には石が2つある。“知恵の封印石”と“愛の封印石”がそれだ。

残る石は“節制の封印石”のみ…。

「へ、陛下!？ どちらへ」

「…“節制の封印石”を取りに行く。これ以上奴等のいいようにはさせない」

「しかし陛下!」

「僕の言うことが聞けないのかッ!!」

「……………」

押し黙った臣下をよそに、少年王はマントを翻した。

「見ている…今こそズタズタにしてやる」

△▽△▽△▽△

「さあーで、今度はどこに行けばいいんだ？」

ヒロが訊くと、メグは気だるそうに後ろ髪をかきあげた。

「そーねー…次は天空の遺跡・マチャピチャでも行ってみる？」

マチャピチャ!? なんだそのインカ帝国っぽい遺跡の名は。

「それはマチュピチュの間違いじゃ…」

「いや、マチャピチャ。3女神の次女アレテーが奉られている」

「じ、次女の…」

となると次に手に入れるべきは“徳の封印石”か。

メグは頭上を仰ぎ、次いで周囲を見回した。

「…さて、ここなら人^{ひと}気もないし、行こっか」

「へ？ どこに？」

メグは信じられないというような咄然とした顔でヒロを見つめた。

「あんた本気でバカあ？ いま言ったマチャピチャに決まってるでしょ！ マチャピチャは天空の遺跡だって言ったばかりでしょうがっ」

「あ、あーそ。って、え？」

「気高き風の精霊よ、汝と共鳴せし我が手中に集え！」

メグが早口で唱えると、ヒロの腰に腕を回して自分の体に密着させた。

「キャー！？ ど、どこ触ってんのっ！！」

「大の男が『キャー』とか言うな！ 私だってこんなオヤヂと密着するの嫌なんだからね！」

「こんなオヤヂというのは俺のことかー！？」

そんな口論をしている間に、体が浮き上がる感覚があった。水に浮いているような感覚だ。

「うわ、あ、うわわわ!」

「ちょっと暴れないでよー! 落ちたらしやれにならないでしょっ!」

ヒロは足をバタつかせるが、足は全く地面につかない。

「参ります。…翔天空!!」

ビュオッ!

「あああああああ!!」

メグの魔法でひたすら上へ勢い良く飛んで行く。地面はあつと言う間に遠くなっていた。飛び立つとき、ヒロは大きく叫んでいた。なぜか関西弁で。

「やっぱコイツあかんわー!!」

着いた先は山の頂上ではなく、空に浮かぶ島だった。簡単に形容表現すると。

「…ら、ラピュタ…？」

「だーかーら、さっきから同じこと何度も言わせないでよ！　ここはマチャピチャ！」

「だってどっからどう見たってマチュピチュじゃねーじゃん！　だってほら、さっきから雲が横を通りすぎていくし！」

島も空をプカプカ浮かんでるし。

立つのは両脇に草の生えた石畳で、石造りの遺跡はかのマチュピチュにそっくりだった。でもどこか天空の城。なぜだろう。

「…封印石は飛行石の役割をしてて、取ったら落ちるってこたぁないよな…」

「なんか言った？」

「いえ何も」

そんなこんなでギャーギャー言い争いながら奥へ進むが、敵らしき姿は見当たらない。

「モンスターも張り付いてないみたいだね…楽な仕事になりそうだよ、ヒロ」

「だいたいけどね」

すると奥の方に、煌々と輝く何かが見えた。それも2つ。

「ああ、封印石だ」

「…今度は、こっちが先を越したみたいね」

2つのうち蒼い封印石：“徳の封印石”をメグがつまむと、それは聖剣におとなしくはめこまれた。

するとそこにコツンという足音がする。

「あーあ、こっちは先に取られちゃったか」

「！ 誰っ!？」

足音のした方を振り返ると、そこにはひとりの少年が立っていた。それも、とても奇妙な。

着ているものは学ランに似ている。靴もスニーカーによく似ている。しかし彼は黒いマントを羽織っており、手には聖杖が握られていた。

「聖杖…？ あなたは隣国の王ですか」

「えっ!？」

それって、マクミラン牧師が言ってた人物だろうか。世界征服を目論んでいるという。

少年王はマントを翻すと、丁寧な仕草でお辞儀した。

「そういう貴女は、マーガレット姫ですね。はじめまして…というべきですか。さて、そこにおられるのは…」

少年王がさらに一步踏み出して、彼の顔が光に照らされる。

その顔を見て、…身構えていたヒロは瞠目した。

少年王も目をカッと見開いた。

お互い見たものが信じられなかった。首を横に振り、2人同時に声を絞り出す。

「……賢人……?」

「……父さん……?」

人違い勇者の冒険記（10）

2人は見合ったまま、お互いに信じられないという顔をした。

「…父さん…？　なんで父さんが…？」

「…賢人…お前こそ、なんでこんなところに…？」

ケントは杖を剣のように構えてフツと笑った。杖先が伸び、鋭利な刃物のようになる。

「それは、僕が“選ばれし王”だからだよ。ニセ勇者さん」

『本来なら10代の、それも知力の高いお方を呼ぶ手はずでした』

いつかのマクミラン牧師が言っていた内容を思い出す。本来なら別に勇者がいて、自分が選ばれたのは人違いだったと。

つまり、ケントが実際に選ばれるはずだった本当の勇者で、それが先に隣国の魔術師になったから、ヒロに代理を求めたとしたら？

「ヒロ！　剣を構えて！」

「あへ？　こ、こうか？」

構えると、聖剣が辛うじて鏝で切っ先を跳ねのけた。

（剣が勝手に動いた！？）

高音域の打楽器みたいに、互いの武器がさかんにぶつかり合う。ケントが攻めてくる杖の先を、剣が辛うじて受け止める。

「賢人！？　おい、やめろって！！」

「父さんを倒せば、この国も僕が救えるんだ！　僕は倒せるよ？　そっちは怖いみたいだけどねっ」

この国を救う？

「だって父さん、勇者の名を騙ったニセモノだって話じゃないか！　ニセ勇者を倒せば箔が付く！　聖剣より先に聖杖を完成させれば、また世界平和に一步近づける！！」

世界平和に？

聞いているだけのヒロには訳が分からなかった。ケントの話を知っていると、どうやら正義の側はあちらにあるらしい。

しかしマクミラン牧師は言っていた。ケントの国は国を次々と侵略している、かの蛮王を倒してくれと。

つまりケントからすれば、自分たちのやっていることは世界平和に繋がり、自分はそのために喚ばれた魔術師の王なのだ。

どちらが正しい道を歩んでいるのか、ヒロには分からなくなってきた。

『石を守って』

「なに！？ 何か言った！？」

「私じゃない」

『お姉様の石を揃えさせないで』

（この声：確かソフィアとかいう、女の子の神様の声：！）

「！ っあ！！」

考えているところにケントの杖先が聖剣を弾き、剣はヒロの数歩後ろにグサツと刺さった。

「…ぐっ」

ヒロはケントに腹部を膝で強打され、そのままの体勢で押し倒される。尖った杖の先が目の前に現れたかと思うと、それはヒロの利き手を縫い止めた。

「ぐあっ！！」

「ヒロッ！？」

刺されたときよりも抜かれたときの方がなお痛い。慌ててメグが駆け寄って、ヒロの手に治癒の術をかけた。

「…くっ…」

「掌を貫通したんだ。無理しないで」

「さて、と…邪魔者が戦闘不能になったところで、僕はゆっくり聖杖を完成させようかな」

言うなりケントは“節制の封印石”に手をかけ、それを外す。

『やめて…お願い…』

（！ ソフィア…？）

「…やめろ…」

「ヒロ…？」

そしてケントは封印石を杖に嵌め込んだ。

（いやーっ！）

「やめろーッ！！」

すると、ケントの杖が輝きだし、そこからひとりの女性が現れた。

眦のつり上がった迫力の美人で、静かにケントを見下ろしている。

「だっ、誰…？」

「…アレテー様…！」

「ええっ!？」

あの3女神の次女とかいう女神様だろうか。ケントは動じず、アレテーの前に膝をついた。

「アレテー様…! お役目どおり、こうして封印を解かせて頂きました」

「…ごくろうであった。選ばれし術者の王よ」

アレテーは含みのある笑みを閃かせた。

「…ならばもう、おぬしらに用はない」

「!？ アレテー様…?」

言うが早いのか、ケントは大水晶の中に閉じ込められてしまった。

「賢人っ!」

「きゃっ!？」

後ろから悲鳴が聞こえたかと思うと、メグも水晶の中に閉じ込められていた。

「メグッ!!」

水晶は中身ごと小さくなり、しまいには親指ほどの大きさにまで縮小した。それをアレテーは掌にそっと握る。

「…これで世界は私のもの…」

フフフと不気味な声を残して、アレテ―は姿を消してしまった。

「待て!!」

そこには置き去りにされた聖杖と突き刺さった聖剣、そして一人取り残されたヒロの姿だけがあった。

人違い勇者の冒険記（11）

幾十ものモンスターを次々と切り結びながら、ヒロは螺旋階段を駆け上がった。上がれば上がるほど、聖剣が共鳴するように鳴り響く。

ソフィアが言うには、長女・エルの封印を解けば、メグとケントを取り戻せるかもしれないとのことだった。

遺跡の名前は不明だが、ソフィアが案内した場所はメグが監禁されていた塔にそっくりだった。白々とした塔が影のようにそびえ立つ様子も、月にまで届くかのような高さも、モンスターがあちこち徘徊していることを除けば本当にメグが捕らえられていた塔と瓜二つだ。

（ま、また竜とか現れたりしないだろうな…）

しかし前回と同様に、唐突に終わった螺旋階段の先には、石碑がぽつんと置かれているだけだった。ヒロはゆつくりと、この広々とした屋上には不似合いなくらいささやかな石碑に歩み寄った。

（…？ 石が嵌め込まれてる…片方が取れて…いや、取られたのか？）

となればこれが例の“正義の封印石”だろう。ヒロは意を決して石に手を伸ばした。

が。

「あいつ、っ！！」

やはりというか、まるで静電気でも喰らったかのように痛いほどの痺れが襲ってきた。しかしこれで怯んではいられない。息子と仲間の命がかかっているのだ。

今度こそ…！

「っ、っ、っ、…っ！」

襲ってくる痛みをこらえて、ヒロは石碑から“正義の封印石”を外した。しかし手は大火傷でもしたかのように酷い有り様になっている。

それでもヒロは臆さずに、聖剣に封印石を嵌め込んだ。

ホッとしたのも束の間、…ヒロは、激痛と疲れからその場に倒れ伏してしまった。

次にヒロがぼんやり目を開けると、ただ、ただ青い空が広がっていた。雲ひとつ浮かんでいない青空なんて久々だ。

雲ひとつない？ ヒロは視線だけを横に向けた。ドライアイスが昇華するみたいにして、白い気体が下から上へと昇って行く。

ここにおいて、ようやくヒロの頭がハッキリしてきた。

半身を起こすと、そこは白い気体の上で、飛行機の中から見た雲の上の景色によく似ていた。

「…なんで、雲の上に寝転がってたの？　ここはどこだ？…もしかして俺、死んだのか！？　賢人もメグも助けないまま！？　ていうか、故郷に妻も子も残したまま！？」

「ふふふ…」

あまりの動揺で気付かなかったが、雲の上には石碑の代わりに人影があった。

人影が振り返った瞬間、…ヒロは鼓動が一気に跳ね上がった。恵に似ている。いや、それ以上に…。

「…江梨子…？」

「…貴方にはそう見えるのですか？　勇者様」

そう言って立ち上がった女は、妻の若い頃に寸分の違いもなかった。ゆっくりとした足取りでヒロに近づく。

「私は、そのように見えるのだそうです。その方にとって、とても好ましい姿に」

ということは、彼女が3女神の長女・エルなのだろう。

ヒロは赤面した。愛する妻の姿とはいえ若い頃を好むとは、なんと欲にまみれていることか。

エルは笑う。

「…妹が、失礼を働きました」

ヒロはハッと顔を上げた。

それに応えるようにエルはヒロを膝元にくずれおる。

「…私も、妹を止めに働きましょう」

「お姉様！」

いつの間に現れたのか、ソフィアも忽然と現れた。

「…それは願ってもないことだが…いい、のか？」

「これは私たち3女神の責任でもあります」

「…助けて、ください」

ヒロが言うと、エルは立ち上がった。

「あの子のいる場所は、分かっています。そこまでご同行しましょう」

そう言うとエルは指笛を鳴らした。

ピーッ、という音に反応して、何かがこちらに羽ばたいてくる。

（ん？ 羽ばたく？）

巨大な蝙蝠の羽をバタつかせてやって来たのは、1匹の巨大な竜だった。

「あわわわわ！」

「大丈夫ですよ勇者様。私は生命の創造主、あらゆる生き物は私に絶対服従です」

「そ、そうなんですカ…」

ともあれヒロたちは竜の背に乗って、アレテーのもとへと飛翔したのだった。



アレテーはクツと顔を上げた。この気配は…！

（まさか…お姉様の封印も解かれた！？）

アレテーは慌てて水晶を見る。どちらの魔術師も昏睡したようにピクリでもない。

（あの勇者が石を取ったか！？）

と、部屋に続く廊下が慌ただしくなった。

振り返るとそこから、完成した聖剣と聖杖を携えた中年の男が駆け込んでくる。

「…やはりお前か…っ！」

「…忘れられてたまるか。メグと賢人を返してもらおう！！」

戦いが始まった。

人違い勇者の冒険記（12）

アレテーは剣をとった。ヒロも聖剣と聖杖を二刀流の要領で構える。剣の使い方など、ましてや二刀流などやり方は分からないが、ソフィアとエルがいいようにはかってくれる。

「…あんたの狙いは何だ、3女神の次女さんよ」

ぶうんと不吉な唸り声と共に剣が襲いかかった。ヒロは弾かれるように飛びすさり、すんでで避けた。

「…世界征服、とでも言うておくか」

アレテーはあっさりと言つてのけた。世界征服だと？ 久しぶりに心の底から肝が冷える。

「世界征服…？ 何のために」

「ようも人間は飽きもせず争うものだ」

アレテーが剣を振り下ろす。ヒロは杖で真上に跳ね上げ、そのまま杖を手放した。

ヒロは息を吸い、聖剣を構え直した。アレテーを真正面からねめ据える。

アレテーは皮肉げに口角をつり上げた。

「干魃や洪水が起ころうが、イナゴに田畑を食い荒らされようが、奇病が流行しようが、国同士の戦はやむ気配もない。だから私がこの世を支配し、戦をなくす」

「そのために：賢人を利用したのか！ 国を残らず平らげ、その後の世界を支配するために！」

「そのとおり：そして私の力で人の間の優劣をなくす。これで戦の起こる道理はない」

『：間違ってる。そんなやり方』

声が、聞こえた。それはメグの捕らえられた水晶の中から聞こえてくる。

「間違ってるだど！？ 私に口出しする気が小娘！」

『人は争う。でも誰かが必ず反対していたでしょう？ アレテー様：あなたのしようとしていることは、その人の良心をも摘み取ることになるんですよ？』

「なっ：！」

『誰もが同じ無機質な世界で、本当に争いはなくなるのですか？：いいえ、確かに争いはなくなるでしょう。けれどもそれは、真の平和じゃない』

「：メグ：？」

『反戦争派の良心をもなくした無機質な平和は、この束の間の平和の時間と空間を止めただけです。アレテー様、あなたのしようとしていることは、本当の平和を手に入れることじゃありません』

「くっ…この、小娘が！ 捻り潰してくれるわ！！」

「メグに手を出すな！！」

ヒロのくりだした剣を、アレテーはガキインと剣で受ける。

そして、その間が決定打となった。

メグが水晶の中で目覚めたのだ。

「！ バカな…目覚めるなど！」

「ご覧になってくださいアレテー様、これが平和を願う者の力です！」

隣で、水晶がバリーンと弾ける音がした。

そこから飛び出したのはケントで、ヒロの放り投げた杖を勢いよく拾う。

「いくぞ賢人！」

「いくよ父さん」

そして聖剣と聖杖に嵌め込まれた封印石が輝きだし、杖と剣が鳴り

響いた。

「平穏を望みし精霊たちよ、聖剣に集い、力を与えよ……“ホーリーソード”――！！」

「はあああああっ！」

……駆け寄るヒロの背後には確かに、笑いながら涙するソフィアとエルの姿が見えた……。

「……ありがとう、ヒロ。助けてくれて」

「ありがとう、父さん」

「……いや……でも、俺……」

……この手で、女神を斬ってしまった。

形は歪んでいたが、確かに平和を望んでいた神を。

なんて罪深いことをしてしまったのだろう。

「それで良かったのですよ、勇者様」

「お姉様を止めていただいて、ありがとうございました」

「……………」

言い訳なんて通用しない。つまるところ自分は、利己的な正義感を、やはり利己的な正義感で潰したのだ。

罪深く汚い神殺しだ。

「…さて、お二方には、そろそろお帰りになられた方がよろしいですね」

「? どこに」

「…元の世界へ」

そう言うソフィアとエルはゆっくりと瞑目し、ヒロとケントの前に異空間を生じさせた。

「これは…路地裏、か?」

「さあ、どうぞお戻りください」

「……………」

ヒロとケントは互いに顔を見合わせた。そこにメグが背中を押す。

「早く帰んなよ、2人とも」

「は、早くって…」

「家族が待ってるんでしょ?」

明るい口調で言うが、メグの目は潤んで充血していた。

「…泣いてるのか？」

「ち、違うよバカ勇者！…いいから早く帰んなさい！！」

そして今度こそ背中を思いきり押される。

「メグっ！！」

2人が最後に見たのは、メグの泣き笑いの顔だった。

唇は確かにこう言っていた。

「さようなら…ありがとう…」

△▽△▽△▽△

「…父さん…父さん…」

「うーん…あと30分寝かせて…」

「父さんってば！」

「あいてっ！」

拳で思いきり頭を殴られた。そこで意識が完全に覚醒する。

「…賢人？」

スーツを来ていないシャツ越しの風が冷たい。ゆらぎかける視線をどうにかしようと、浩之は両目を細めて周囲を見た。

薄暗い路地裏、灰色の壁、積み上げられたものがバラバラに崩れた背中のダンボール箱。覗き込んでくる息子の賢人と、2、3歩離れて制服警官。

警官が、大丈夫かと訊いてきた。被害届を出すかとか、相手の名前は知ってるかとか。

そうだ、と浩之は思い出す。ここで危ないお兄ちゃんたちにカツアゲされて、ボコボコにされて…それから…。

「賢人…なんか俺、すげー夢みちやったよ」

「夢って、どんな？」

浩之は黙って首を振った。長くて、とても話しきれない。

「ああ、そう。じゃあ父さん」

賢人は父親にこっそり耳打ちした。

「…マーガレット姫をどうやって救出したのか、後で教えてね」

「…え？」

浩之は幻聴じゃないかと本気で思った。マーガレット姫…だって？

（なんでアイツが夢の情報を？…まさか…）

夢じゃ、ない？

『さようなら…ありがとう…』

別れ際の、メグの表情を浩之は思い出していた。

後日。

「行ってきまーす」

「お。早いな賢人」

いつもと変わらない朝。賢人は今日も朝練のため早く出掛ける。

「またこっそり知らないところに行ったりしないだろうな」

浩之が言うと、賢人は押し黙ったまま靴紐を結び始めた。

「賢人…？」

「…もう、逃げないよ。父さんたちに内緒で遠いところに行ったりしない。僕はこの日本で、フツの生活を謳歌するよ。…約束するから」

そう言って賢人は玄関を出ていった。

（賢人…）

「ぎゃー父さんどいてーっ！」

色気のない悲鳴と共に、ドンッ、と恵が体当たりしてきた。

「なんだ朝から騒々し…あれ？ めぐ、なんかずいぶん雰囲気変わったな」

ポリウムマスカラはスッピンに変わり、膝丈20cm以上だったスカート丈もやや長くなり、茶髪のエクステも取り外している。

「そーかそーか。お前もそのチャライ態度を改めよう…」

「ぶっ…違うよお。新しくできた彼氏が、こっちのがいいって言うからさ」

……………。

「お、おいめぐ、いま何て…？」

「じゃ、行ってきまーす」

「めぐ、待ちなさい!!」

聞く耳持たず、恵はスタコラサッサと逃げていった…。

「はぁ…まあいいだろう、いつか紹介してくれるだろうから」

「あら、妙に期待してるわね」

妻の江梨子が鞆を手渡した。

「あなたに子供を信じる心根があったかしら〜？」

浩之はふっと笑った。

「…当たり前だろう？」

親が子供を信じないで、誰が信じる。

了

人違い勇者の冒険記（12）（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

m
（
m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9574k/>

人違い勇者の冒険記

2010年10月12日19時19分発行